
健康管理室～二人の先輩に身体の全てを記録される特待生
～ 【体験版】

【 目 次 】

第1話 入寮健診

第2話 体組成測定

第3話 柔軟性評価

1

第1話 入寮健診

第1話：入寮健診

四月の風が桜を散らしていた。

早瀬透はスーツケースを引きずりながら、体育大学の正門をくぐった。地方の公立高校から、スポーツ特待生として進学した。寮費免除。それがなければ、母一人の家計では到底通えない大学だった。

寮棟は古い鉄筋コンクリートの四階建てで、壁にツタが這っている。正面玄関を入ると、ロビーのソファに一人の男が座っていた。日焼けした肌に茶髪。人懐っこい笑顔が、こちらを見つけて立ち上がる。

「早瀬くんだね。待ってたよ」

男は透のスーツケースに手を伸ばした。

「朝比奈悠。三年。副寮長やってる」

「よろしくお願いします」

透は軽く頭を下げた。朝比奈はスーツケースを軽々と持ち上げ、階段を先に登り始める。

「部屋は三階の307。角部屋だから日当たりいいよ」

案内された部屋は六畳一間。ベッド、デスク、小さなクローゼット。窓からはグラウンドが見える。

「食堂は一階。大浴場は地下。門限は二十二時。ゴミ出しは火曜と金曜」

朝比奈はてきぱきと説明しながら、透の荷解きまで手伝ってくれた。話しやすい人だった。兄がいたら、こんな感じかもしれない。

夕食の時間になると、朝比奈が迎えに来た。食堂には二十人ほどの寮生がいる。柔道部、レスリング部、陸上部。体格のいい男ばかりだ。

「あれが四年の鷹司先輩。寮長」

朝比奈が食堂の奥を顎で示した。窓際の席に一人で座っている長身の男。黒縁の眼鏡。姿勢が良い。周囲の喧騒とは無縁のように、静かに箸を動かしている。

「ちょっと取っつきにくいけど、悪い人じゃないよ」

朝比奈は味噌汁を啜りながら言った。透は頷いた。

食事を終え、食器を片付けた時だった。

「あと、一つ大事なこと」

朝比奈の声のトーンが変わった。笑顔はそのまま。ただ目が笑っていない。一瞬だけ。

「今日の夕食後、入寮健診があるから。全員必須」

「健診？」

「うん。寮則第七条ってやつ。体育大学だから、普通の健診よりちょっと詳しくやるんだけどね」

朝比奈は笑った。何でもないことのように。

「寮長の鷹司先輩が担当だから。四年生で、健康管理委員長もやってる人」

「わかりました」

透は頷いた。大学の寮なら健診くらいあるだろう。そう思った。

夕食後、透は一階の奥にある部屋に案内された。ドアに『健康管理室』のプレートが掛かっている。

ノックすると、低い声が応えた。

「どうぞ」

部屋に入った瞬間、消毒液の匂いが鼻をついた。病院ではない。だが、あの匂いが透の背筋を伸ばさせた。

白衣を着た男がデスクに座っていた。長身で肩幅が広い。水泳で鍛えたような逆三角形の体型。黒縁の眼鏡の奥で、切れ長の目が透を見据えた。

「早瀬透くんですね。座ってください」

透はパイプ椅子に腰を下ろした。部屋は保健室のような作りで、ベッド、体重計、血圧計が並んでいる。カーテンで仕切れる一角もあった。

「鷹司怜です。四年生で、この寮の寮長と健康管理委員長を兼任しています」

鷹司は立ち上がり、手を差し出した。握手した手は冷たく、骨ばっていた。指が長い。

「今日は入寮に伴う基礎健診を行います。体育大学の寮生として、身体の状態を正確に把握しておく必要がありますから」

鷹司の声は穏やかだが、事務的だった。感情の読めない目。表情が乏しい。

「まず、身長と体重から」

透は靴を脱ぎ、身長計に乗った。

「百七十二センチ。次、体重」

「六十一キロ。BMI二十点六。良好です」

鷹司がタブレットに数値を打ち込む。

「血圧も測りましょう」

腕にカフを巻かれる。機械が作動する。

「上が百十八、下が七十二。正常範囲内ですね」

ここまでは普通だった。透は内心、安堵していた。

鷹司がタブレットを置き、透に向き直った。

「ここからは、より詳細な身体評価に移ります」

眼鏡の奥の目が、わずかに光を帯びた気がした。

「上を脱いでください」

「はい」

透はTシャツを脱いだ。中距離ランナーの身体が露わになる。無駄な脂肪のない、しなやかな筋肉。肌は白い。

鷹司が近づいてきた。聴診器を首に掛けている。

「心音を確認します」

冷たい金属が胸に当てられた。透は息を止めた。

「普通に呼吸してください」

鷹司の手が聴診器を移動させる。左胸、右胸。その手が、わずかに乳首をかすめた。

「っ……」

透の肩が跳ねた。鷹司は気にした様子もなく、背中に回る。

「深呼吸を三回」

言われるがまま吸って、吐く。鷹司の手が背中を移動する。肩甲骨の間。腰のあたり。触診というより、撫でるような手つき。

「胸囲を測ります」

メジャーが胸に巻かれる。鷹司の指が脇の下をくぐり、乳首の上を通過した。

「八十九センチ」

次にウエスト。メジャーが腰に回される。鷹司の指がへその下をなぞった。

「七十三センチ。ウエストヒップ比も確認しますので、ヒップも」

メジャーが臀部に巻かれる。鷹司の手が尻の膨らみに沿って動く。

「八十八センチ」

タブレットに数値を入力する音。透は上半身裸のまま、腕を下ろした。

鷹司がメジャーを片付け、透に向き直った。

「次に、下半身の評価に移ります」

その声は変わらず穏やかだった。

「ズボンと下着を脱いでください」

透の手が止まった。

「……全部、ですか」

「ええ。体育大学の寮生は、全身の筋肉量や皮下脂肪の分布を正確に記録します。下半身も含めて、です」

鷹司の目が透を見つめている。無表情。だが、そこに有無を言わせない圧があった。

透は唇を引き結んだ。寮則。特待枠。母親の顔が頭をよぎる。

ベルトに手を掛けた。バックルを外す。金属の音が静かな部屋に響いた。ジッパーを下ろし、ズボンをひざまで落とす。

黒いボクサーブリーフだけになった透の太腿を、鷹司の視線がなぞった。

「下着も」

透は奥歯を噛んだ。指がウエストのゴムに掛かる。

一気に下ろした。

冷たい空気が、剥き出しの下半身を撫でた。透のペニスが無防備に曝される。陰毛は薄く、萎えた状態の性器が太腿の間で小さく揺れた。

「足を肩幅に開いてください」

透は言われるがまま脚を開いた。鷹司が正面から、透の股間を見下ろしている。

沈黙が長い。

透は天井を見上げた。蛍光灯が白く光っている。視線が刺さる。見られている。自分の性器を、じっと。

「大腿部の筋肉量を確認します」

鷹司の手が透の太腿に触れた。冷たい指。外側から内側へ、筋肉を揉むように掴む。

「筋繊維の質は良好ですね。ランナーらしい」

指が太腿の内側に入り込む。ゆっくりと上へ移動していく。

「内転筋の張りを診ます」

親指が内腿の付け根に食い込んだ。陰囊のすぐ横。

「くっ……」

透の膝が震えた。鷹司の指は冷たいのに、触れられた場所が熱を持つ。

「反対側も」

同じ手順。左の太腿を揉まれ、内側を辿られ、付け根を押される。今度は指先が陰囊に触れた。一瞬。だが確実に。

「……っ」

透は息を飲んだ。鷹司は何食わぬ顔でタブレットにメモを打ち込んでいる。

「次に、性器の状態を確認します」

透の心臓が跳ねた。

「……なんで、そんなことまで」

声が掠れた。鷹司は透を見上げた。パイプ椅子に座ったまま、透の股間と視線が同じ高さになっている。

「体育大学のアスリートは、泌尿器系の健康管理も重要です。包茎の状態、睾丸の位置異常、精索静脈瘤の有無。これらは競技パフォーマンスにも影響します」

医学用語を並べる声は、淡々としていた。教科書を読み上げるような口調。

「寮則第七条に基づく健康チェックの項目に含まれています。全寮生が対象です」

透は唇を噛んだ。拒否すれば規則違反。退寮。退学。母親に借金を背負わせる。

「わかりました」

小さく答えた。自分の声が遠く聞こえた。

「では、観察させてもらいます」

鷹司の手が伸びてきた。冷たい指が、透のペニスに触れた。

萎えた性器を、親指と人差し指で持ち上げる。実験器具を扱うような手つき。

「通常時の長さ、およそ八センチ。太さは標準的ですね」

指がペニスの先端に移動した。包皮を軽く摘む。

「包茎の確認をします。皮を剥きますので、動かないでください」

「っ……待っ……」

鷹司の指が包皮を掴み、ゆっくりと引き下げた。

ぬるり、と亀頭が露出する。ピンク色の先端が冷気に触れ、透の腰が反射的に引けた。

「動かないで」

鷹司の左手が透の腰を押さえた。右手は包皮を完全に引き下げたまま、亀頭を観察している。

「仮性包茎ですね。剥けば問題なく露出します」

指が亀頭の縁をなぞった。カリ首の段差に沿って、ゆっくりと一周する。

「ひっ……」

声が漏れた。透は自分の口を手で塞いだ。敏感な部分に直接触れられた衝撃が、背筋を走り抜ける。

「亀頭の感度が高いようですね。衛生面を考えると、日常的に剥いて洗う習慣をつけた方がいい」

鷹司は淡々と告げながら、包皮を元に戻した。また引き下げた。亀頭が隠れ、露出する。その繰り返し。

「可動性は良好です。癒着もない」

三度目に剥かれた時、透のペニスがわずかに硬さを増していた。血流が集まり始めている。

透は顔から火が出そうだった。違う。反応したいわけじゃない。ただ、触られているから――。

「反応していますね」

鷹司が指摘した。感情のない声。

「生理的な反応ですから、気にする必要はありません。むしろ正常な証拠です」

その言葉が、余計に透を追い詰めた。

「睾丸の触診に移ります」

鷹司の指が陰嚢を包んだ。両方の睾丸を、転がすように触れる。

「左右のサイズ差を確認します。右がやや大きいですね。正常範囲内です」

指が睾丸を一つずつ丁寧に触る。重さを量るように持ち上げ、弾力を確かめる。

「んっ……」

透は唇を噛んだ。鈍い快感が下腹部に広がっていく。ペニスが、さらに硬くなっていた。半勃起の状態。持ち上がり始めた性器が、鷹司の視界に入っている。

「精索静脈瘤の確認をします。腹圧をかけてください。咳をする要領で」

「……ごほっ」

「もう一度」

「ごほっ」

鷹司の指が精索を辿る。陰嚢の上部から、鼠径部に向かって。指先が恥骨の際を押し、透の身体が震えた。

「異常なし」

鷹司が手を離れた。透はほっとした。だが、次の言葉で凍りついた。

「勃起の状態も確認したいのですが」

「は？」

「勃起障害の早期発見は重要です。現在、半勃起の状態ですね。完全勃起までの所要時間と、勃起時のサイズを記録します」

鷹司がペニスを握った。今度は掌全体で包み込むように。

「ちょっ……自分で……」

「正確なデータを取るには、一定の刺激条件で測定する必要があります」

鷹司の手が動いた。しゅ、と一度だけ扱いた。根元から先端へ。ゆっくりと。

「っ……」

透の腰が震えた。鷹司の手は冷たいのに、ペニスに血液が集中していく。硬くなる。脈打ち始める。

しゅ、しゅ、と二度、三度。規則的に扱かれる。鷹司の指が長い。根元から亀頭の先端まで、一度のストロークで届く。

「んっ……やめ……」

「もう少しです」

鷹司の親指が亀頭の裏側を擦った。裏筋に沿って、ぐりっと押し上げる。

「ひあっ……！」

透のペニスが一気に硬くなった。完全勃起。上向きに反り返り、腹に張り付くほどに。先端から透明な液体が一滴、滲み出した。

「勃起完了までおよそ四十秒。反応速度は良好です」

鷹司がペニスに定規を当てた。根元から先端まで。

「勃起時十四センチ。太さはおよそ四センチ。平均よりやや長い」

タブレットに数値を打ち込む。透は天井を睨んだ。視界が滲む。自分のペニスが見知らぬ男の前で硬く勃起上がり、サイズを記録されている。

「先端の分泌液も確認しますね」

鷹司の指が亀頭の先端に触れた。滲み出た先走り液を指先で拭い取り、親指と人差し指の間で引き伸ばす。

「粘度は正常。色も透明。問題ありません」

糸を引く透明な液体を、鷹司は光に透かすように見つめた。

透は目を閉じた。もう見ていられなかった。

「以上で基礎健診は終了です」

鷹司が手を引いた。アルコール消毒のボトルで手を拭く。透のペニスは勃起したまま、行き場を失って空を向いている。

「服を着てください」

透は震える手で下着を履いた。勃起が収まっていない。ボクサーブリーフの中でペニスが窮屈に押し込められる。ズボンを履く時、布地が亀頭を擦って、歯を食いしばった。

Tシャツに袖を通す。服を着ると、少しだけ鎧をまとった気分になった。

「今日の結果を説明します」

鷹司がタブレットの画面を見せた。数値とグラフが並んでいる。身長、体重、体脂肪率、胸囲、ウエスト。そして――勃起時サイズ、感度評価、包茎タイプ。

全部、記録されていた。

「三日後に体組成の詳細測定を行います。食事内容の記録も開始しますので、朝比奈から説明を受けてください」

「三日後も、こういうことをするんですか」

透の声は低かった。怒りを抑えている。

鷹司がタブレットを閉じ、眼鏡を指で押し上げた。

「『こういうこと』とは、健康診断のことですか」

その目が、透を射抜いた。

「あなたがこの寮にいる限り、定期的に受けてもらいます。寮則第七条に基づいて」

透は拳を握った。爪が掌に食い込む。

「嫌なら、退寮届を出してください。特待枠の返上手続きは、学生課で受け付けています」

鷹司の声には、一片の感情もなかった。

透は何も言えなかった。椅子から立ち上がり、ドアに向かう。

「早瀬くん」

背中に声が掛かった。

「次回は体組成です。全身の皮下脂肪を計測しますので、測定しやすい格好で来てください」

透は振り返らなかった。ドアを開け、廊下に出る。

足が震えていた。壁に手をついて、深く息を吐いた。

まだ勃起が収まっていなかった。ズボンの中で、自分の性器が存在を主張している。あの男の冷たい指の感触が、まだ残っている。

部屋に戻る。ベッドに倒れ込む。

天井を見つめた。ここで四年間過ごす。毎月、あの部屋に行く。服を脱いで、身体を見られて、触られて、記録される。

母親の笑顔が浮かんだ。「透が大学に行けて、お母さん嬉しい」と泣いた顔。

逃げられない。

携帯が震えた。通知を開く。

LINEのグループに招待されていた。『寮生健康管理グループ』。送信者は鷹司怜。

最初のメッセージが表示されていた。

『早瀬くん、お疲れ様でした。三日後の測定に備えて、明日から食事の写真を送ってください。朝・昼・夕、間食含めてすべて。よろしくお願いします』

透は携帯を枕元に置いた。

天井の染みを数えた。一つ、二つ、三つ。数えている間に、勃起はようやく収まった。

だが、下腹部に残る熱は消えなかった。

あの冷たい指に触れられた記憶が、じわりと身体に染みていく。

それが嫌悪なのか、それとも別の何かなのか。

透には、まだわからなかった。

2

第2話 体組成測定

三日間、透は食事の写真を撮り続けた。

朝、学食のトレイ。昼、コンビニのおにぎりとサラダ。夜、食堂の定食。間食にプロテインバーを一本。すべてLINEに送る。

返信はいつも同じだった。鷹司からの短い一言。

『確認しました』

それだけ。だが、その三文字が透の日常に重さを加えていた。食べるたびに、報告する。報告するたびに、あの男の冷たい指を思い出す。

二日目の昼、ついカップ麺を食べた。写真を送ると、いつもと違う返信が来た。

『ナトリウム過多です。代替案を考えてください』

透は携帯を睨んだ。たかがカップ麺一つで。だが、言い返す相手はいない。画面の向こうの文字だけが、淡々と透を管理している。

三日目の朝、目が覚めると最初にしたことが、朝食のトレイを撮影することだった。無意識に。その自分に気づいて、透は手を止めた。

もう習慣になりかけている。たった三日で。

朝食を済ませ、隣のテーブルにいた二年生の柔道部員に話しかけた。入寮時の健診について聞いたかった。

「ああ、体組成とか柔軟性とか、一通りやったよ」

男は味噌汁を飲みながら答えた。

「どこまで脱ぎましたか」

「全部。体脂肪測るのに服着てたら意味ないし」

男は何でもないように言った。透は次の質問を飲み込んだ。性器を触られたか。それを聞ける雰囲気ではなかった。

「鷹司先輩、淡々としてるけど丁寧だよ。朝比奈先輩は気さくだし。慣れれば平気」

慣れる。その言葉が透の喉に刺さった。

朝比奈は変わらず面倒見が良かった。食堂で隣に座り、練習のアドバイスをくれる。洗濯機の使い方を教え、近くのドラッグストアの場所も案内してくれた。

「透って走ってる時、左肩が下がるクセあるよね。コーナーで特に。フォーム直すと記録伸びるよ」

朝比奈は同じ陸上部ではないのに、透の練習をよく見ていた。サッカー部のグラウンドから、トラックが見えるのだろう。だが、コーナーでの左肩の癖まで見抜くほどの観察眼に、透は少しだけ居心地の悪さを覚えた。見られている。練習中も。

三日目の夕食後。朝比奈がトレーを片付けながら言った。

「今日、体組成の測定だよ。忘れてない？」

笑顔。いつもの兄貴分の顔。

「覚えてます」

透は箸を置いた。味噌汁が半分残っている。

「大丈夫だって。前回より全然楽だから。キャリパーでつまむだけ」

朝比奈が透の肩を軽く叩いた。手のひらが温かい。この人は味方だ、と思いたかった。だが「つまむだけ」という言葉の軽さが、逆に引っかかった。

十八時。健康管理室。

ドアをノックする。前回と同じ低い声が応える。

「どうぞ」

部屋に入ると、鷹司が白衣を着てデスクに座っていた。その横に、朝比奈も白衣を羽織って立っている。

「今日は朝比奈にも記録を手伝ってもらいます」

鷹司の声は事務的だった。透は朝比奈を見た。朝比奈は笑顔で小さく手を振った。

「服を脱いでください。全部」

透は息を吐いた。前回の記憶が蘇る。冷たい指。定規。タブレットに打ち込まれる数字。

Tシャツを脱いだ。ジャージを下ろした。靴下を脱いだ。下着に手を掛ける。朝比奈の視線を感じる。前は鷹司一人だった。今日は二人。

下着を下ろした。

全裸の透を、二人の男が見つめている。鷹司は無表情。朝比奈は――わずかに唇の端が上がっていた。

「体組成の測定を始めます」

鷹司がトレイを持ってきた。その上に、ステンレス製の器具が載っている。ペンチのような形。先端にパッドが付いている。

「キャリパーです。皮下脂肪の厚みを測定する器具です」

鷹司がキャリパーを手に取り、パッドを開閉して見せた。かちっ、かちっ、と金属音が鳴る。

「七箇所の皮膚をつまんで、脂肪の厚みを計測します。それぞれ三回ずつ測定し、平均値を記録します」

「七箇所」

「上腕三頭筋、肩甲骨下部、胸部、腹部、腸骨上部、大腿部、腋窩中央線。国際規格に準拠した

測定ポイントです」

透は頷くしかなかった。名前だけ聞けば、医学的に正しいのだろう。

「まず上腕から。右腕を下ろして、力を抜いてください」

鷹司が透の右腕の裏側に立った。指で皮膚を摘み上げる。ぐにっ、と肉が掴まれる感覚。

「つまんだまま、キャリパーを当てます」

かちっ。金属のパッドが皮膚を挟んだ。圧迫感。痛くはないが、異物に身体を計られている感覚が不快だった。

「六ミリ。記録」

「了解」

朝比奈がタブレットに数値を入力する。透は朝比奈の方を見た。白衣を着た朝比奈は、食堂で笑っていた時と別人のようだった。表情は柔らかいのに、目がデータを追っている。

「もう二回」

同じ場所を、もう二度つままれる。毎回、鷹司の指が皮膚を持ち上げ、キャリパーで挟む。冷たい金属と、鷹司の指の冷たさが重なる。

「六ミリ。安定。次、肩甲骨下部。背中を向けてください」

透は背を向けた。鷹司の指が肩甲骨の下を探る。骨の突起を確認し、そこから二センチ下を斜めに皮膚を摘み上げた。

「んっ……」

背中肉をつまみ上げられる感覚に、透は息を詰めた。思ったより痛い。

「力を抜いてください。筋肉が緊張していると、皮脂厚が正確に測れません」

鷹司のもう片方の手が、透の肩に置かれた。安定させるためだろう。だが、背中に人の体温を感じると、身体が強張る。

「七ミリ。もう少し上……ここですね」

指の位置を微調整される。何度も触れられる。背中に鷹司の吐息がかかった。近い。

「記録。次、胸部」

鷹司が透の正面に回った。透は咄嗟に目を逸らした。見られたくなかった。自分の身体が、至近距離で観察されている事実から、目を背けたかった。

「右の乳首と脇の中間点を測定します」

鷹司の指が透の胸に触れた。乳首のすぐ横。五センチも離れていない場所を、指で摘み上げる。

「……っ」

透の肩が跳ねた。乳首への接近を意識した瞬間、身体が勝手に反応する。

「動かないでください。正確に測れません」

鷹司の声に感情はない。キャリパーが皮膚を挟む。かちっ。金属の冷たさが乳首の横に広がる。

「五ミリ」

朝比奈が記録する。透は鷹司の指が離れるのを待った。だが、鷹司は同じ場所をもう一度つまみ上げた。今度はやや位置をずらし、乳首により近い。

「二回目。位置を微調整します」

親指が乳首をかすめた。ほんの一瞬。爪の端が乳首の縁に触れただけ。

「ひっ……」

声が漏れた。透は自分の口を手で塞いだ。顔が熱い。

鷹司は何も言わなかった。ただ、キャリパーを当てた。かちっ。

「五ミリ。三回目」

三度目のつまみ上げ。今度は親指が乳首の上を滑った。偶然のように。だが確実に。

「あ……」

乳首が硬くなった。小さく勃起した乳首が、冷たい空気に晒される。透は唇を噛んだ。

「五ミリ。平均五。記録」

朝比奈がタブレットを操作する音がする。透は朝比奈を見た。朝比奈は画面を見つめていた。透の乳首が硬くなっていることに、気づいているはずだ。だが何も言わない。

「左胸も同じポイントを測定します」

鷹司の指が左胸に移動した。今度は最初から、乳首に近い位置を掴む。

「……っ」

透は歯を食いしばった。左の乳首も硬くなっていく。鷹司の指が触れるたびに、小さな電流が走る。

「五ミリ。同値ですね」

淡々と。機械のように。だが鷹司の指は、確実に乳首周辺を三回ずつ掴んでいった。六回。乳首の横を六回つままれた。

「次、腹部」

鷹司が透の前に屈んだ。へその横二センチの皮膚を、縦に摘み上げる。

「ここは脂肪が少ないですね」

指が腹筋の溝をなぞった。六つに割れた腹筋の境目を、一つずつ確かめるように指先が這う。キャリパーが当てられる。

「四ミリ」

三回測定。鷹司の指が透の腹を何度も触る。三回目は、へそのすぐ下――下腹部の際どい位置まで降りてきた。恥毛の生え際まで、指二本分しかない。

「この脂肪の付き方は、ホルモンバランスの指標にもなります」

鷹司がそう説明しながら、下腹部の皮膚を摘んだ。透の陰毛が鷹司の指に触れた。

「っ……」

鷹司は無言でキャリパーを当てた。かちっ。

「四ミリ。体幹の脂肪率が低い。ランナーとしては理想的です」

鷹司の声は褒めているのに、温度がない。データを読み上げているだけだ。透は拳を握った。下腹部の皮膚をつままれた場所が、じんわりと熱を持っている。

「次、腸骨上部」

鷹司の指が透の腰骨を探った。骨盤の出っ張りの上、斜めに皮膚を摘む。

「んっ……」

腰骨の上は敏感だった。くすぐったさと違う、鈍い痺れのような感覚。鷹司の指が恥骨に近い。下腹部を掴まれている意識が、透の呼吸を乱す。

「五ミリ。記録」

三回。骨盤の際を三回つまみ上げられた。そのたびに指が恥骨寄りに触れ、陰毛の生え際に近づく。

透の性器が反応し始めていた。まだ勃起はしていない。だが、血流が変わった。ぬるい熱が下腹部に溜まる感覚。

「次、大腿部。足を肩幅に開いてください」

透は脚を開いた。鷹司が透の前に片膝をついた。透の股間と、鷹司の顔が近い。

鷹司の指が太腿の前面を掴んだ。膝と股の中間点。ここは普通だった。

「八ミリ。やや厚い。筋量に対して標準的ですが」

三回測定。問題はここからだった。

「内側も測定します。体育大学の基準では、内転筋群の脂肪分布も記録対象です」

鷹司の指が、太腿の内側に移動した。

「脚をもう少し開いてください」

透は脚を広げた。鷹司の指が内腿を掴む。外側とは違う、柔らかい皮膚。普段は太腿同士が触れている、誰にも見せない場所。その肉が冷たい指に挟まれる。

「……っ」

敏感だった。太腿の内側、付け根に近い部分を掴まれた瞬間、鳥肌が全身に広がった。鷹司の指

が透の陰囊のすぐ下――三センチと離れていない場所を挟んでいる。

「動かないで」

キャリパーが当てられる。かちっ。金属のパッドが内腿の柔らかい肉を挟む。冷たさが深部まで伝わる。

「七ミリ」

鷹司の指が離れた。だが、すぐにまた掴まれる。二回目。位置をわずかに上にずらし、より付け根に近い場所。

「ひっ……」

指先が陰囊の皮膚をかすめた。掠めただけ。だが透の身体は震えた。ペニスに血液が集まり始めている。半勃起の兆候。萎えていた性器がゆっくりと持ち上がりかけ、太腿の間でわずかに揺れた。

「七ミリ。三回目」

三回目。鷹司の親指が内腿を深く掴み、人差し指が陰囊の裏側にまで回り込んだ。睾丸の輪郭に指が触れ、その根元の皮膚を巻き込むように摘み上げる。

「んっ……」

透は声を殺した。だが腰が後ろに引けた。逃げようとする反射。

「動かないでください。測り直しになります」

鷹司の左手が透の腰骨を掴んだ。固定された。逃げ場がない。右手が再び内腿を掴み、キャリパーを当てる。

かちっ。

金属のパッドが閉じた場所は、陰囊の付け根と内腿の境目だった。性器と脚の間。ほんの少しずれば、睾丸そのものを挟んでいた。

「七ミリ。安定値ですね」

鷹司が手を引いた。透のペニスは半勃起していた。下を向いていた性器が前方を向き始め、長さも太さも増している。先端に包皮が被ったまま、ゆっくりと膨張していた。

鷹司の目がそれを捉えた。一瞬。だが、何も言わなかった。視線はすぐにタブレットに戻る。

「反対側も」

右の内腿。同じ手順。掴む。挟む。記録する。三回。右側でも鷹司の指は陰囊の際を辿った。指が触れるたびに、透のペニスがびくりと跳ねる。もう明らかだった。半勃起どころではない。包皮の下で亀頭が膨らみ始め、ペニスが自重で垂れ下がれなくなっている。

朝比奈がタブレットから目を上げた。透の股間を見た。数秒。そして、何事もなかったようにタ

タブレットに戻った。

透は天井を見上げた。蛍光灯の光が滲む。

「最後、腋窩中央線。脇の下です。腕を上げてください」

透は右腕を上げた。脇が露わになる。鷹司の指が脇の皮膚を摘んだ。

ここは性的な場所ではない。だが、全身をつままれ続けた透の身体は過敏になっていた。指が触れるだけで、鳥肌が立つ。

「六ミリ。記録」

三回測定。左側も。すべてが終わった。

「以上で体組成測定は完了です」

鷹司がキャリパーをトレイに戻した。透は腕を下ろした。全身に、つままれた跡が残っている。赤い小さな痣。上腕、背中、胸、腹、腰、太腿、脇。身体中に鷹司の指の跡がある。

そして、半勃起したペニスが、まだ前を向いていた。

「体脂肪率を算出しますね」

鷹司がタブレットで計算する。朝比奈が横から画面を覗き込んでいた。

「九・二パーセント。アスリートとしてかなり優秀な数値です」

鷹司が告げた。透は頷いた。声が出なかった。

「服を着てください」

透は下着を手にとった。半勃起が収まっていない。ボクサーブリーフに脚を通す時、性器が布に擦れて、息を詰めた。

服を着終わった透に、鷹司がタブレットの画面を向けた。

「今日の結果です。前回の基礎健診と合わせて、あなたの身体データが揃いました」

画面には、透の身体の数値がびっしりと並んでいた。身長、体重、体脂肪率、各部位の皮脂厚。そして前回の――勃起時サイズ、感度評価。すべてが一つのファイルに統合されている。

「これ……全部保管されるんですか」

透の声は低かった。

「もちろん。健康管理記録ですから」

鷹司がタブレットを閉じた。

「次回は柔軟性の評価です。関節の可動域を測定します」

「いつですか」

「三日後。同じ時間に」

透はドアに向かった。

「早瀬くん」

呼び止めたのは朝比奈だった。透は振り返った。朝比奈が笑顔で近づいてくる。

「柔軟性テスト、俺も手伝うからさ。ストレッチの補助が必要なんだ」

朝比奈の手が透の肩に置かれた。温かい手。

「股関節の可動域とか、一人じゃ測れないし。俺が支えるから安心して」

透は朝比奈の笑顔を見上げた。この人は味方だ。そう思いたかった。だが、今日。白衣を着た朝比奈が、タブレットに透の身体データを記録していた姿が、頭から離れなかった。

「ありがとうございます」

透は廊下に出た。

部屋に戻り、シャワーを浴びた。身体中の赤い跡を、湯で流す。つままれた場所が、微かに熱を持っている。

鏡を見た。胸の、乳首の横に残る赤い痣。腰骨の上。内腿の付け根。

鷹司の指が触れた場所が、身体に刻まれている。

透はシャワーの水を冷たくした。熱は消えなかった。鷹司がどこを触ったか、身体が全部覚えている。

3

第3話 柔軟性評価

コーナーを回った瞬間、太腿の内側がつった。

痛みではない。二日前、鷹司にキャリパーで挟まれた場所だ。赤い痣はもう消えかけている。なのに、筋肉がまだあの圧力を覚えていた。走るたびに、乳首の横と内腿の付け根が自己主張する。

透は速度を落とさなかった。走っている間は忘れられる。管理室の蛍光灯も、キャリパーの金属音も、冷たい指の感触も。八百メートルのタイムは高校時代の自己ベストに近い。コーチからも「特待生の名に恥じない走りだ」と声をかけられた。

だが、トラックを離れると戻ってくる。

朝起きると食事の写真を撮る。練習の前にストレッチの時間を記録する。夜、入浴後に体重を測ってLINEで報告する。すべて鷹司の指示で、透の身体はもうそれを習慣として覚え始めていた。

三日目。朝比奈が昼食後に声をかけてきた。

「今日の夕方、柔軟性テストだよ。ジャージでいいから、動きやすい格好でね」

透は頷いた。今回はストレッチだ。つまむわけでも、性器を測るわけでもない。前回より楽なはずだ。そう自分に言い聞かせた。

「俺もストレッチの補助で入るから。鷹司先輩は測定担当、俺が身体を支える係」

朝比奈が自分の肩を回した。サッカーで鍛えた広い肩幅。

「二人がかりで柔らかくしてやるよ」

冗談めかした口調。透は薄く笑った。笑えなかったが、笑った。

夕食後、透は朝比奈と並んで健康管理室に向かった。廊下を歩きながら、朝比奈が話しかけてくる。

「今日は柔軟性テストだから、前回みたいに全部脱がなくていいよ。ジャージでOK」

「それは助かります」

「ただ、上は脱いだ方が肩甲骨の動きが見やすいかな」

ドアをノックする。鷹司の声が応える。

健康管理室に入ると、前回までの体重計やキャリパーは片付けられていた。代わりに、部屋の中央にヨガマットが敷かれている。壁際には分度器のような器具——ゴニオメーターが二本と、メジャーが用意されていた。

「今日は関節の可動域を評価します。柔軟性はケガの予防に直結しますから」

鷹司が白衣のポケットに手を入れたまま言った。朝比奈は既に白衣を脱いでTシャツ姿になっている。

「ストレッチの補助をするからさ。俺も動きやすい格好にした」

朝比奈が腕を回して見せた。鍛えられた上腕が、Tシャツの袖からはみ出している。

「上を脱いでください」

鷹司の指示。透はTシャツを脱いだ。上半身裸。ジャージの下はそのまま。

「前回の測定で、体脂肪率九・二パーセント。筋肉量は良好ですが、柔軟性が競技レベルに達しているか確認が必要です」

鷹司がタブレットを操作しながら説明する。

「まず肩関節から。腕を真上に挙げてください」

透は両腕を上げた。鷹司がゴニオメーターを透の肩に当て、角度を測る。

「百七十五度。良好です。次、水平に」

腕を横に広げる。回旋運動。前方、後方。鷹司が角度を記録していく。ここまでは普通だった。身体に触れるのは最小限で、器具越しの接触だけだ。

「肩甲骨の可動域も見ます。壁に手をついて、胸を押し出してください」

透は壁に手をついた。胸を前に突き出す。鷹司の手が背中に触れた。肩甲骨の動きを確認する。

「もう少し胸を張って」

鷹司の手が透の背中を押した。肩甲骨が内側に寄る。

「朝比奈、記録を」

「了解」

次に脊椎。前屈、後屈、側屈。透は言われるがまま身体を曲げた。鷹司がメジャーで可動域を計測する。

「前屈は指先が床に届きますね。柔軟性は悪くない」

問題は、次だった。

「股関節の可動域を測定します」

鷹司の声のトーンは変わらない。だが、透の背筋に冷たいものが走った。

「マットの上に座ってください。開脚します」

透はマットに座り、脚を広げた。ジャージ越しに太腿の内側が伸びる。

「もう少し開いて」

鷹司がゴニオメーターを膝に当てた。角度を測る。

「百二十度。ランナーとしては標準的ですが、もう少し開きたい」

鷹司が透の前に立ち、両手を差し出した。

「手を握ってください。引っ張って可動域を広げます」

透は鷹司の手を握った。冷たい。骨ばった指。鷹司がゆっくりと引く。透の上体が前に倒れ、脚がさらに開いていく。

「百三十度。もう少しいけますね」

引っ張られる。内腿が悲鳴を上げる。

「痛いですか」

「……少し」

「痛みの手前まで攻めます。それが可動域を広げるコツです」

鷹司が力を緩めた。透は息を吐いた。

「次、朝比奈。背中から補助して」

朝比奈が透の後ろに回った。透の背中に、朝比奈の掌が当てられた。温かい。大きな手。

「前に倒してくよ」

朝比奈が透の背中を押した。上体が前に倒れる。開脚したまま、胸がマットに近づいていく。

「あっ……」

内腿が限界まで伸びた。股関節が軋む。そして――ジャージの股間がマットに擦れた。開脚の姿勢で前屈すると、股間が床に押し付けられる。

「もう少し」

朝比奈が体重をかけてきた。透の背中に、朝比奈の胸板が触れた。覆いかぶさるように。

「っ……」

朝比奈の体温が背中に広がる。大きな身体に押さえつけられている。動けない。

「百四十度。記録」

鷹司が数値を読み上げた。朝比奈が体重を戻す。透は上体を起こした。顔が熱い。

「次、仰向けで片脚の挙上テスト。マットに寝てください」

透はマットに仰向けになった。天井の蛍光灯が白い。

「右脚を持ち上げます。膝を伸ばしたまま」

鷹司が透の右足首を掴んだ。そのまま脚を持ち上げていく。垂直に近い角度。透の股関節が引っ張られる。

「八十度。もう少し」

鷹司が脚をさらに押す。透の脚が頭の方へ倒れていく。この姿勢では、ジャージの裾が太腿まで落ち、膝下が露出する。そして、股間のシルエットが布越しにはっきりと浮かび上がる。

鷹司の目が、透の股間を見た。仰向けで脚を上げた姿勢。ジャージの生地が股間に張り付き、ペニスの形が浮き出ている。

透は目を閉じた。見られている。

「左脚も」

左脚を同じように持ち上げられる。鷹司の手が足首から脛、太腿の裏へと滑った。太腿の裏を押しながら、脚を透の胸に近づける。

「痛みは」

「大丈夫です」

「嘘をつかないでください。限界を超えると靭帯を痛めます」

鷹司の声が近い。透の脚を押さえている鷹司の顔が、透の股間のすぐ上にある。呼吸が感じられるほどの距離。

「次、股関節の内旋・外旋を測ります。膝を立ててください」

透は両膝を立てた。鷹司が透の膝を掴み、外側に倒した。蛙のように膝を開く形。

「内旋は良好ですね。外旋を見ます」

膝を反対側に倒す。透の太腿が開き、股間が無防備になる。ジャージの布地が張り、ペニスの輪郭が鮮明に浮き出た。

「外旋四十五度。やや硬い。日常的にストレッチが必要です」

鷹司が記録する。透は膝を閉じようとした。

「まだです。次のテストに移ります」

鷹司の手が透の膝を押さえた。

「うつ伏せになってください」

透はうつ伏せになった。マットに顔を押し付ける。この姿勢なら、少なくとも股間は見えない。そう思った。

「蛙のポーズを取ります。両膝を横に開いて、股関節を外転させてください」

透は言われるがまま、膝を横に開いた。うつ伏せのまま、蛙のように膝を曲げて広げる姿勢。尻が突き出される。ジャージの布地が臀部に張り付き、尻の形をなぞっている。

「もっと広く」

鷹司が透の膝を外側に押した。股関節が限界まで開く。この姿勢では、太腿の間に空間ができ、股間が下からでも見える。

「朝比奈、背中を押さえて」

朝比奈が透の背中に手を置いた。両手で。肩甲骨の下、腰の上。体重をかけてくる。透の上体がマットに押し付けられ、蛙の姿勢が深くなる。尻が高く突き出され、ジャージの布地が臀部に食い込んだ。尻の割れ目のラインが浮き出る。

「いい姿勢です。このまま保持してください」

鷹司が透の背後に回った。蛙のポーズで突き出された尻を、真後ろから見ている。

「ここの開きが足りませんね」

鷹司の手が透の内腿に触れた。膝の内側から、ゆっくりと上へ辿っていく。太腿の内側の筋肉を確認するように、五本の指が這う。ジャージの上からでも、鷹司の指の冷たさが伝わった。

「内転筋が硬い。ここをほぐさないと、可動域は広がりません」

鷹司の指が内腿の付け根に到達した。前回、キャリパーでつまんだ場所と同じ。陰囊のすぐ横。今度はジャージ越しだが、指の位置は変わらない。

「少し揉みます」

鷹司の親指が内腿の付け根に食い込んだ。深い圧。筋膜をほぐすように、ぐりぐりと円を描く。ジャージの薄い生地を通して、鷹司の指の関節が肉に食い込む感覚が伝わる。

「んっ……」

声が漏れた。うつ伏せのまま、脚を開いた姿勢で、内腿の付け根を揉まれている。ペニスがマットに押し付けられていた。鷹司の指が筋肉を圧迫するたびに、透の腰が微かに揺れ、マットの表面とペニスが擦れる。

「力を抜いて。筋肉が硬直していると効果がありません」

朝比奈の声が頭上から降ってくる。背中を押さえている手が温かい。親指が透の腰のくぼみに当たっている。

鷹司の指が、反対側の内腿にも移動した。左右の付け根を交互に揉む。深い圧。筋肉の奥まで到達するような力。右の付け根を揉む時、鷹司の手の甲が透の陰囊に触れた。ジャージ越し。だが、睾丸の感触は明らかに鷹司に伝わっている。

「あ……っ」

透のペニスが硬くなり始めていた。マットに押し付けられた性器に血液が集まっていく。うつ伏せの姿勢では逃げ場がない。膨張するペニスがマットに圧迫され、その圧迫自体が刺激になる。悪循環。

鷹司の指が内腿を揉むたびに、透の腰が不自然に動く。腰が浮き、沈む。マットとペニスの間で摩擦が生まれる。逃げているのか、擦り付けているのか、もう自分でもわからなかった。

「腰が動いていますよ」

鷹司の声。淡々としている。だが、その一言は透の心臓を殴った。見られている。気づかれている。腰の動きの意味を、理解されている。

「すみません」

「筋肉が緩んできた証拠です。もう少し続けます」

鷹司の指が、さらに奥に入り込んだ。太腿の付け根から、臀部の下端――尻の肉と太腿の境目を

辿る。指が会陰部に近づいている。

「ここも硬いですね」

親指が臀部の際を押した。尻の割れ目の始まりに近い場所。ジャージ越しだが、指の圧力は確実に伝わる。

「んんっ……」

透は顔をマットに押し付けた。声を殺す。だが、ペニスはもう完全に硬くなっていた。マットに押し付けられた勃起が、布越しに存在を主張している。

「はい、うつ伏せはここまで。仰向けに戻ってください」

透は凍りついた。仰向けになれば――勃起がばれる。ジャージの薄い生地では隠せない。

「……少し、待ってください」

「どうしました」

透は答えられなかった。顔がマットに押し付けられたまま動かない。

「早瀬くん。仰向けに」

鷹司の声が平坦に繰り返す。

透はゆっくりと身体を回した。仰向けになる。

ジャージの股間が、明らかに膨らんでいた。勃起したペニスが布地を持ち上げ、テント状に突き出ている。先端の位置が、はっきりと分かる。

沈黙。

鷹司が透の股間を見た。眼鏡の奥の目に、感情は読み取れない。

「……運動時の血流変化は正常な生理反応です」

鷹司が言った。それだけ。他に何も。

「最後のテストです。ハムストリングの柔軟性を確認します」

鷹司が透の右脚を持ち上げた。勃起した股間が、再び鷹司の視界に入る。ジャージの布地がペニスに張り付き、亀頭の形まで浮き出していた。

「脚を伸ばしたまま、胸に近づけます」

鷹司が脚を押す。透の太腿が胸に近づく。股関節が開き、勃起した股間がさらに突き出る。

鷹司の手が太腿の裏から膝裏に移動した。脚を固定する。その手の小指が、透の臀部に触れていた。尻の丸みの頂点。

「七十五度。目標は九十度です。毎日のストレッチメニューを作成します」

鷹司が脚を下ろした。

「以上で柔軟性評価は終了です」

透はマットの上で動けなかった。勃起が治まっていない。ジャージの中で、ペニスが脈打っている。

「服を着てください。上だけで結構です」

透はTシャツに手を伸ばした。座り上がる時、股間のテントが揺れた。朝比奈が、その瞬間を見ていた。

Tシャツを被る。少しだけ安心する。だが、腰から下は隠せない。

「今日の結果をまとめます」

鷹司がタブレットを操作した。

「肩関節、脊椎は良好。股関節の外旋と内転筋の柔軟性に課題があります。来週から毎晩、入浴前にストレッチの時間を設けます」

「毎晩……」

「二十分程度です。朝比奈が補助に入ります」

朝比奈が手を挙げた。

「俺でよければ。ストレッチの補助くらい任せてよ」

透は朝比奈を見た。笑顔。温かい目。だが今日、朝比奈は透の背中に体重をかけ、動きを封じた。あの手の圧力を、透の身体が覚えている。

「わかりました」

透は立ち上がった。ジャージのポケットに手を突っ込み、股間を隠すように歩いた。

「あ、早瀬くん」

ドアの前で、鷹司が呼び止めた。

「来週、入浴指導も開始します」

「……入浴？」

「アスリートの身体は正しく洗わないと、肌トラブルや感染症のリスクがあります。正しい洗い方を知っていますか」

透は答えなかった。鷹司の目を見返した。冷たい目。だが、その奥に何かが揺れた気がした。一瞬だけ。

「知りません」

透は嘘をついた。知っている。誰でも知っている。だが、そう答えなければこの会話は終わらない。

「では、来週。入浴の仕方から指導します。朝比奈も同席しますので」

透はドアを開け、廊下に出た。

部屋に戻る間、ジャージの中でペニスが揺れ続けた。まだ半勃起が残っている。内腿の付け根に、鷹司の指の圧力が残っている。背中には、朝比奈の体温が。

シャワーを浴びた。熱い湯を頭から被った。目を閉じると、蛙のポーズで内腿を揉まれている自分の姿が浮かんだ。

ペニスが硬くなった。

透は壁に手をつき、荒い呼吸を吐いた。触りたい。自分の手で。だが、それは――あの部屋で感じたことを認めることになる。

冷水に切り替えた。

身体が震えた。だが、ペニスは簡単には萎えなかった。

ベッドに横になる。携帯が震えた。

『本日の測定結果を添付します。股関節の外旋45度は改善が必要です。明日からストレッチ動画を送りますので、毎晩実施してください』

鷹司からのメッセージ。添付されたPDFには、透の身体の可動域が図示されていた。人体のシルエットに、角度と数値が書き込まれている。

透は携帯を枕元に置いた。

自分の身体が、データになっていく。サイズ、脂肪厚、可動域。すべてが数値化され、あの男のタブレットに蓄積されている。

そして、次は入浴。

服を着たまま触られることと、裸で触られること。その境界が、また一つ消えようとしている。

透は毛布を頭まで被った。鷹司に管理されない時間が、どんどん減っていく。